



THE JAPANESE SCHOOL in LONDON

ロンドン日本人学校だより 11

学校教育目標

自ら学び、心豊かにたくましく国際
社会を生きぬく児童生徒の育成

合い言葉：自立・貢献

2021(令和3)年

月5日発行 ロンドン日本人学校
令和3年度 第7号

かわっていくこと その2

校長 石山 秀樹

…今まで自分達で計画し、実行する機会はありませんでしたが、やってみたら難しくても楽しくてびっくりした。…ぼくはこの文化祭を監督としてやってみて、みんなの協力する力がまた一段、強くなったと思う。そして、みんなで一つのものを作り上げる楽しさが分かった。色々な問題があったが、何とかみんなで乗り越えて作った劇が完成したときの喜びは、今までで一番だった。…(小6 矢崎悠真)

…最初は裏方として活動するのに抵抗がありました。観客からの評価という、自分にとっての志が道具係には無いからです。しかし、時間を割いて道具を作っているうちに、道具へのこだわりや製作への楽しさを抱くようになりました。それは、道具係の仲間も同じでした。道具について困ったことがあれば互いに意見を出し合っていて、材料の調達、デザインの考案までやるようになっていました。また、演者の劇に対する情熱を知っているうちに、この人達をサポートしたいと思うようになっていました。そして本番では、演者が百パーセント輝けるようにこちらも百パーセントのサポートができましたし、表を支える裏の大切さを知りました。…(中2 藤澤安優菜)

これらの文章は、文化祭を終えて児童生徒が書いた文章から、本人の理解を得て抜粋したものです。

さる10月22日・23日に行われた「ロンドン日本人学校 創立45周年記念文化祭」は、お蔭様で大盛況のうちに幕を閉じることとなりました。参観いただいた多くの保護者の皆様、運動会に引き続き例年の3倍にもなるほどお越しいただいた来賓の皆様方、さらに“後輩”への激励のために来校した帝京ロンドン学園・立教英国学院の皆様方からも、この上ない賛辞をいただきました。それらは全て、この文化祭の成功のために打ち込んできた児童生徒らと、指導・支援にあたってきた本校スタッフ達が受け取るべきものと捉えています。

そもそものコロナ禍での開催の可否、2年ぶり

の開催のため、子供達に加え担任である派遣教師の7割が本校の文化祭の経験が無いこと(さらに、現在の日本では演劇に取り組む学校は希少で、教師に演劇指導の経験が無い者も多いこと)、保護者・来賓の参観とコロナ対策の在り方等々、今回の文化祭の実施には、いくつもの課題がありました。好評を得た Youtube 限定配信にしても、私自身は「まずは文化祭の復興そのものが最優先課題」と考えていたため、教師の手を割くこととなる配信には消極的であったところ、担当の「やれます」という言葉でゴーサインを出した経緯などもあり、漠然とした言い方ながら児童生徒・スタッフの熱量・エネルギーが会の成功を導いたことは間違いありません。

そこまでして、このような行事を開催する意義・価値はどこにあるのか。そのことを示したのが先に紹介した児童生徒の文章であり、当日とそれまでの取組で児童生徒一人一人が経験した「変容」です。開会式で私は、「子供達のうちから湧き上がるエネルギーを活かし、今までの自分を超越する何かに挑戦し、仲間にも勇気付けられたり勇気付けたりしながら、つけた力を自在に表現し合う、その経験は、子供達が未来の社会を渡ってゆく上で欠くことができないもの」と述べました。本校の学校教育目標も意味している「グローバル人材の育成」は昨今の世間でもよく取り上げられるところです。そこには、単に英語をはじめとした第2・第3言語を操れるということだけでなく、来たるべき変化をおそれず、進んで他と関わりながら何事かに挑戦し続ける考え方や態度の育成も含まれます。通常の授業で学ぶ内容に加え、このような行事の取組を通じた多様な「経験」こそが、将来の人生において生きて働く力となる、と考えます。このことを本校では「貢献」という合い言葉に込めています。

今回、児童生徒は学校が用意した文化祭の「目標」を軽々と超え、自在に成長した姿を見せました。学校もまた、「ロンドン日本人学校でなければできない経験」を提供し続けられるよう、弛むことなく探ってまいります。